

世のなか安穩なれ、仏法ひろまれ

内藤 昭文（ないとう しょうぶん）

今回の七百五十回大遠忌法要のローグン「世のなか安穩なれ」とはどういうようになることなのでしょう。「安穩」は、現代では日常用語としてはあまり使用されないの、考えにくいかもしれません。

この「安穩(安隱)」は、^{げんじょうさんぞう}玄奘三蔵以後の新訳ではクセーマ(ksema)「苦悩なく安楽で平安なこと」の訳語として一般的でした。しかし、それ以前では^{しほういん}四法印の「涅槃寂靜」の「寂靜」(新訳)と同じくシャーンティ(santi)の訳語でもあります。これらの言葉は、現在使われる「平和(peace)」とも訳されています。「安穩(安隱)」では分かり難くても、現代において「平和」は誰でも使ったことがある言葉ですから、考える手懸かりになると思います。では、「平和」を願っている私たちは、どんな状態を「平和」であると考えているのでしょうか。

多くの場合、「戦争と平和」という言葉があるように「戦争」と「平和」を対立したものと考え、「戦争(紛争=争い)」のない状態を「平和」と考えていないのでしょうか。現に今起こっている戦争や紛争などを中止させることは大切であり、その方法を^{もさく}模索することは重要です。

しかし、人類の歴史はその繰り返しでした。その歴史を振り返ってみると、戦争(争い)をしていない時、人類は次の戦争(争い)の準備をしていたのです。戦争の準備をしている状態を「平和」と言えるのでしょうか。確かに、政治論や経済論からは「平和」と呼ぶのかもしれませんが、いつまた戦争へ突入するか分からない不安的な状態を「平和」と言ってしまってもよいのでしょうか。

さて、二〇〇二年十一月四日版「朝日新聞」に「平和は作るもの」という題のもと、ある記事が掲載されました。それは、コスタリカの元国連大使、カレン・オルセンさんとの対話集会在東京で開かれたことを伝えていました。彼女は、夫の故フィゲレス元大統領が憲法で常備軍を廃止した遺志を継いで平和外交に活躍しており、日本の弁護士や作家に招かれたのだそうです。講演会の中で、壇上に上がった小中学生から「平和の反対語は？」と聞かれたカレンさんは、「平和とはいかに生きるかということ。平和に対する言葉は戦争だけではなく飢餓、貧困、無知、暴力、残虐などたくさんある」と答えたと伝えていきます。

この記事は世界的規模の大きな視点のようにも思えますが、現代を生きる人間に共同体における平和を考える視点を与えています。「平和とはいかに生きるかということ」とは、

まさに釈尊しゅつげんが出家求道しゅつげんした「生老病死しょうろうびやうしのいのちを如何いかに生きるか」という問いです。釈尊の説いた仏法とはその問いに対する答えであり、平和(寂静)なる涅槃を目指す道ちゅうどう(中道)なのです。また、平和の反対語と示された「戦争、飢餓、貧困、無知、暴力、残虐」とは、四法印の「一切皆苦いっさいがいく」の内実であり、私たち人間が生きている営いとなみの現実の有り様です。その現実の有り様を逃げることなく直視し、「苦」と知らされ自覚する必要くたい(苦諦)があります。しかも、その苦の原因が人間の煩惱ぼんのうであることを知らされ自覚する必要じつたい(集諦)があると説かれたのです。しかし、人間はその苦の原因が自己の煩惱であることを認めようとはしません。それを認めてこそ、人間として如何に生きるかの第一歩となるのです。その苦の滅した安穩(平和)なる状態を目指して(滅諦めつたい)、その安穩なる状態を乱す原因を滅する道どうたい(道諦)を釈尊は説かれたのです。「戦争、飢餓、貧困、無知、暴力、残虐」の原因がなくなれば、新たな争いなどに怯おびえ、争いの準備をしてしまうのです。ですから、その原因を知らされ自覚することこそ、仏教徒として大切なことなのです。

釈尊はその苦の原因を「我執がしゅう」として人間の自己中心の心であると説示されます。それこそが平和(安穩)ではない世界を生み出し続けているのです。また、自己を正当化し絶対化する「我執」の心によって、自分自身を知らず(愚癡ぐち)、自己の欲望を貪むさぼり続け(貪欲とんよく)、自分の思い通りにならないことに怒りしんじ(瞋恚)、他者を責めるのです。

親鸞聖人が『ご消息』(『浄土真宗聖典(註釈版)』七八四頁)で、「世のなか安穩なれ」に続いて「仏法ひろまれ」と言われているのは、人間の我執による愚かさや罪深さを知らされるには、仏智に知遇することが必要だからです。

まさにこのことが、大遠忌に向けた『ご消息』の、

如来の智慧によって、争いの原因が人間の自己中心性にあることに気付かされ、心豊かに生きることのできる世の中、平和な世界を築くために貢献したいと思いと述べられていることだと思います。一人でも多くの方々と共に、如来の智慧に照らされ如来の慈悲に包まれながら念仏申し、いのちを恵まれ生かされることを一緒に慶よろこびたいと思います。

(司 教)